

ハネカクシ漫歩(5)
花に集まるハネカクシ類

渡辺泰明

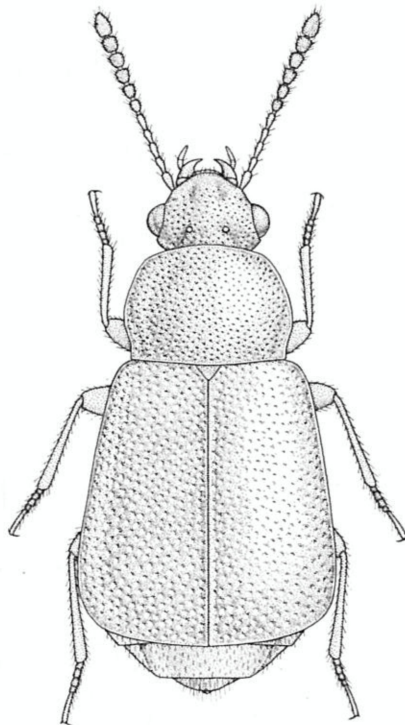
このシリーズの初めに記したことはあるが、日本でハネカクシ類の同好者がなかなか現れない理由の一つは、この科の多くの種類が、糞や動植物の腐敗物等、通常人間が忌み嫌う様な環境に好んで生息していることと関係しているように思われる。しかしながらハネカクシ類の全てが、このような汚らしい環境にのみ生息している訳ではなく、美しいものとして人間に愛でられているもの一つである色とりどりの花も、ある種のハネカクシ類の生活舞台になっている。今回はこのような訪花性ハネカクシ類について紹介することにした。

一口に訪花性ハネカクシといっても、完全に花の色香に魅せられて、その蜜や花粉の摂取を目的とする食植性のもと、花に食糧源を求めて飛来する小昆虫類を捕食するために、花上で待ち受ける食肉性のもとの二つのグループに分けることができる。前者のグループは、いわゆるハナムグリハネカクシと呼ばれる一群で、最近でこそ特に誌上で取り上げられて報道されることがなくなってきたが日本ではかなり古く園芸害虫として報告されている。その中で最も古いものは、長野農試時報(1922)に集録されている「苹果新害虫、ハナムグリハネカ

クシに就いて」と題する報告であるが、残念ながら筆者はこの雑誌を直接見る機会を持たず、詳しい内容については不明である。しかし翌年、この害虫について報告した村田寿太郎の記述(1923, 中央園芸(239): 33~34)を見ると、上記報告の内容をある

程度推察することができる。またこの村田の報告は昆虫世界編輯氏(名和靖)によっても紹介されているが(1923, 昆虫世界, 27(307): 106), その一部を抜粋すれば次の通りで、この害虫の加害状況を知ることができる。即ち、「苹果の未だ蕾の際側面より食入して開花に先だち雌雄蕊並びに花卉を食す。長野県北安曇郡平村に於て大正11年大発生し、宣伝さるゝに到りしものにて隠翅虫にて生植物を食するは珍らし」。次いで長野新聞(1935)は「北安の果樹園に恐ろしい害虫」と題する記事を掲げたが、この内容も病虫害雑誌(1935, 22(6): 504)に紹介され、それには「北安曇郡大町田辺果樹園林檎畑に得体の知れぬ害虫、全国に殆ど類例のない“花もぐり羽根かくし、が発生し被害大である」と記されている。

このようにいずれの報告も、ハナムグリハネカクシが長野県北安曇郡に栽培されていたリンゴの花に、



第1図 *Eusphalerum pollens* (SHARP) ハナムグリハネカクシ (大菩薩峠産, Scale=1.0mm)

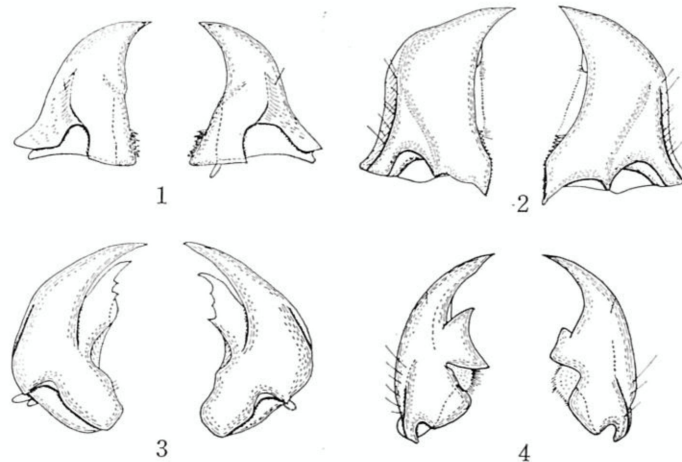
甚大な被害を与えたことを指摘している。しかし加害虫である「ハナムグリハネカクシ」なる害虫に関しての形態的な説明は全くなされていない。但し松村松年(1931, 日本昆虫大図鑑: 刀江書院), 横山桐郎(1932, 日本昆虫図鑑: 北隆館)及び江崎悌三・堀浩・安松京三(1938, 原色日本昆虫図説: 三省堂)等は, ハナムグリハネカクシ *Anthobium pollens* SHARP を図説した折に, 本種が苹果や梨花の花粉や花柱を食害することをそれぞれ附言している。

なお, ハナムグリハネカクシ類は, 従来 *Anthobium* 属の名で知られていたが, 最近では *Anthobium* 属の亜属であった *Eusphalerum* を属として取り扱っている。従って, かつての日本産 *Anthobium* 属は *atrocephalum* GYLL. を除いて全てが *Eusphalerum* 属に含まれることになった。*Eusphalerum* 属は頭頂に1対の単眼を有する特異なグループであるヨツメハネカクシ亜科 *Omaliiinae* に含まれ, 現在では3つの亜属に分けられている。これらの種はいずれも訪花性で, 北半球に広く分布しているが, 日本からは *Eusphalerum* 亜属のみが知られ, 6種が記録されているに過ぎない。しかし実際にはこの2倍以上の種類が採集されているが, これらの種類はきわめて類似した色彩・形態を呈しているので同定はかなり困難である。また生態等についても全く不明であるが, 成虫は高山帯を除いては春から初夏にかけて出現し, サクラ, ナン, ツツジ, ウツギ等この季節に咲く種々の花に集来する。そして種類によっては集来する個体数がきわめて多いので, 時には前述の果樹園におけるような, 思わぬ被害を生ずることも容易に想像することができる。

高倉康男(1972)は北九州の古処山のアオキの花および鷹巣山一の岳のハイノキの花に, それぞれ多数のハナムグリハネカクシ(学名は *Anthobium*

pollens SHARP として記録)が集来していたことを報告したが, それと同時に後者の場合には, 陽の当るハイノキの花にのみ集来していたことを指摘している(北九州の昆虫, 18(3/2): 23~24)。このようなハナムグリハネカクシ類の訪花が, 花に対する特定の嗜好性によるものなのか, あるいは花の存在している物理的条件によるものなのかについての詳細な報告がないので明確な断言はできない。因みに筆者は本年5月18日, 山梨県南都留郡秋山村で, 陽の良く当るミツバウツギの花から採集した約100頭のハナムグリハネカクシを調査した所, 全てがキイロハナムグリハネカクシ *E. solitare* (SHARP) に近縁の1種のみであった。このヨツメハネカクシ亜科に属するきわめて特異な形態的特徴を呈する1種が, SHARP(1889)によって *Omalium curtellum* として命名記載されているが, 本種は箱根宮の下で, ミツマタの花から採集された個体に基づくものである。本種の形態的特徴は *Omalium* 属のものとは明らかに異なっており, SHARP 自身もその記載の中で, 本種は *Omalium* と *Anthobium* 両属とをつなぐものであろうと指摘している。なお, 本種の分類学的位置については, 筆者が昨年の盛岡で行われた昆虫学会大会の折に, 日本からは未記録の *Mannerheimia* 属に含めるのが妥当であることを指摘した。

ヨツメハネカクシ亜科にはこの他訪花性の種として *Amphichroum* 属や, 日本からは未発見の *Philorinum* および *Anthophagus* の両属に含まれるものがあり, 更に大部分の種が樹皮下等に生息している *Hapalaraea* 属に含まれる *H. (Dropephylla) ioptera* (STEPH.) も花上から採集されるという。しかしヨツメハネカクシ亜科に属するこのような訪花性種の全てが, 花粉や花蜜等の植物質を摂食しているとは限らないようで, 例えば *Anthophagus al-*



第2図 花上から採集されるハネカクシ類の大股(背面)

1. *Eusphalarum pollens* (SHARP); 2. *Amphichroum canaliculatum* (ERICHSON);
3. *Anthophagus alpinus* (FAB.); 4. *Eucibdelus japonicus* SHARP.

pinus (FAB.) の大脛は、本亜科の他の訪花性ハネカクシ類のそれとは全く異なり、切歯部と臼歯部とは融合して臼歯部が不明瞭となり、それに反して切歯部はきわめて良く発達し、しかもそれぞれは内縁に鋭い歯状突起を具えている。このような大脛の構造は食肉性の種類に見られるもので、本種の食性と関連しているものと考えられる。しかしながら本属に含まれる種は日本に分布せず、食性に関する報告もないので詳細については不明である。

花上に見られるハネカクシ類の第2のグループである捕食性種としては、ハイロハネカクシ *Eucibidulus japonicus* SHARP をあげることができる。本種はいわゆる徘徊性の種で、樹上に普通に見られ

るが、時には花上にも集来し他の小昆虫類を捕食する。筆者の手許には斎藤秀生君がクリの花から、また鈴木亘君がシシウドの花からそれぞれ採集された標本がある。

以上が、現在まで筆者が知り得た、花に集来するハネカクシ類に関する見聞である。この他筆者自身花上からの採集経験を持たないが、ハイロハネカクシと似たような生活様式を示し、分類学的にもきわめて近縁なキオビハイロハネカクシ *Phytolinus lewisi* SHARP や同属のシラフハイロハネカクシ *P. variegatus* K. SAWADA et NAKANE も花上に集来することは十分考えられよう。

(東京農大)

○ヨコミゾチビゴミムシダマシの分布

コブゴミムシダマシ科 Zopheridae のヨコミゾチビゴミムシダマシ亜科 Usechinae は、2属5種が日本と北アメリカだけから記録されているといった興味ある分布をしている。これとよく似た分布を示す例は他にもいくつか知られており、古い系統の種が特殊な環境に遺存したものが多く注目されている。

この亜科のうち、*Usechimorpha* 属は唯一種が北アメリカだけに分布しており、*Usechus* 属が日本に分布し、ヨコミゾチビゴミムシダマシ *U. chujoi* KULZER (四国) とツシマヨコミゾチビゴミムシダマシ *U. tsushimensis* H. KAMIYA (対馬) の2種が記載されている。その他に、本州から第3の種も得られているが標本の少ないことから検討されないままにある、体長約3mmと小さいこともあって、あまり記録のない珍しい種といえるが、筆者は四国石鎚山(2頭。1. xi. 1962)、対馬有明山(1頭。16. vii. 1960)、本州八ヶ岳(1頭。27. vii. 1955)などの朽木で得られた3種の標本を検している。

最近になって、韓国産の標本を検する機会を得たので、興味ある記録として朝鮮半島を *Usechus* 属の新しい分布につけ加えたい、この標本は1971年11月11~13日に Kyongsangpuk-do, Mt. Sudosan の標高700m地点で登日邦明君が採集したものである。種としては、日本産種とは明らかに異なるが唯一の標本でもあり、いづれ多くの標本が得られれば新しい種として記載されてよいものであろう。

ここには、とりあえず *Usechus* 属が大陸の一端でも得られたことのみを報告しておく。

貴重な標本を検する機会を与えられた登日君にお礼申し上げる。(名古屋女子大学、佐藤正孝)

○メダカオオキバハネカクシ石垣島に産す(琉球諸島のハネカクシ 2)

メダカオオキバハネカクシ *Megalopsidia japonica* NAKANE は1957年中根猛彦氏により奈良春日山、大杉谷、四国沖の島を模式産地として記載された特異な形態を持つハネカクシであるが、最近になって四国各地から次々に採集され(吉田、剣山・県民の森総合学術調査報告書、p.153, 1971; 佐藤、徳島昆虫、2:16, 1974) また対馬からも発見されてい

る(木下、四国昆虫学会会報、11(3): 98, 1972)。本州からの記録としては小田原からの報告がある(平野、神奈川虫報、46: 22, 1975)。しかしながら琉球列島からは未知であった。このたび、山崎秀雄氏よりいただいた標本中に石垣島産の本種を発見することが出来たので報告する。

1頭、吉野(石垣島)、viii. 15. 1965、山崎秀雄採集。

従って現在までの分布としては本州、四国、沖の島(高知県)、九州、対馬、石垣島ということになる。なお手許にある奥多摩小川谷(10. vii. 1998、郷遠採集)の標本とを比較してみたが石垣島産の個体が若干小型(4.5mm)であることを除いては顕著な形態的差異は認められなかった。貴重な標本を恵与下された山崎秀雄および郷遠両氏に厚くお礼申し上げます。(東京都町田市、柴田泰利)

○八重山諸島産ヒメドロムシ科2種の新産地

従来、八重山諸島からはヒメドロムシ科4種が知られていたが、*Zaitzevia* 属に含まれる種は、佐藤正孝氏によって記載された *Z. aritai* および *Z. yaeyamana* の2種である。(1963: New Entom., 12(7): 39~41)。前者は西表島産、後者は石垣島産の個体に基づいて、それぞれ記載されたが、その後、模式産地以外からの報告はなされていない様である。しかしながら筆者は本年、八重山諸島産甲虫類の調査を行った折、下記の通り未記録産地から、両種を採集したので記録しておく。

1. *Zaitzevia aritai* M. SATO

25頭、川良、石垣島、八重山諸島、23. 25. iii. 1975、筆者採集。

2. *Zaitzevia yaeyamana* M. SATO

12頭、大富、西表島、八重山諸島、2. 4. iv. 1975、筆者採集。

なお、両種とも、点刻および微細印刻には若干の個体変異が認められるが、それぞれ模式産地の個体から、明確に識別出来る形態的差異を見出すことは出来なかった。

末筆ながら種々ご教示いただいた東京農業大学昆虫学研究室の渡辺泰明先生に心からお礼申し上げます。

(横須賀市 佐々木健次)

琉球列島のタマムシ

秋山 黄洋

最近、筆者は入江平吉、柏井伸夫、杉野広一、清野隆、高桑正敏、西山保典、正木清、畑山武一郎の各氏のご好意により、多数の琉球列島産タマムシを検視する機会を得た。その中に分布上興味ある種がいくつか含まれていたため報告したい。なお日頃有益なご助言を賜っている黒沢良彦博士並びに標本を提供された上記諸氏に深謝する。

1. *Buprestis (Buprestis) haemorrhoidalis arakii* Y. KUROSAWA, 1942 クロタマムシ琉球亜種

1 ♀, 沖縄本島名護城, 19. vi. 1973, 清野隆採集; 1 ♀, 沖縄本島与那, 30. vi. 1973, 畑山武一郎採集; 1 ♀, 沖縄本島奥間, 23. vi. 1973, 秋山黄洋採集。

本土産亜種とは、前胸背の点刻が粗く、強い赤味を帯びる点で区別されている。現在まで奄美大島以外からの記録はなかった。

2. *Coraeus formosanus* Miwa et Chūjō, 1935 タイワンナカボソタマムシ (写真左)

1 ♀, 石垣島川平公園, 30. v. 1970, 西山保典採集; 1 ♀, 石垣島オモト岳, 23. v. 1974, 高桑正敏 採集; 1 ♀, 沖縄本島与那, 24. v. 1972, 入江平吉採集; 1 ♀, 奄美大島大和村中川内, 23. vi. 1969, 入江平吉採集。

本種は1935年三輪勇四郎、中条道夫両博士により、台湾埔里産の個体に基づき記載されたもので(原記載には個体数、性別は記述されていない)現在まで日本領土内からの採集記録はない。

本種は体長10mm内外。短太で、頭頂および前胸背は強い赤銅光沢を帯びる。上翅は青みがかった黒で、肩部および会合線周辺は赤銅色。腹部は青みがかった黒で、唐金色を帯びる。頭頂は深く凹陷し、前胸背側縁は強く膨出する。前胸背中央部および両側に五つの白斑を持ち、上翅中央部および下方に波状の斑紋をそなえる。翅端は円く、その側縁は鋸歯状。腹端は円い。

現在まで検視した標本は4 ♀♀で個体数は少ないものようである。加害植物は未知であるが、石垣島川平公園産以外にはシイの叩き網で得られているので、採集に行かれた際、ご注意願いたい。なお台湾産個体との比較は、♂が未検であるので、後日♂を検視する機会を得た時に詳しく報告したい。

3. *Agrilus yasumatsui* Y. KUROSAWA, 1964 ヤスマツナガタマムシ

1 ♀, 奄美大島八津野, 30. vi. 1973, 正木清採集。原記載以後初めての記録で♀は未発見であった。ソダの叩き網によって得られた。

4. *Agrilus malloti* Y. KUROSAWA, 1957 クモガタナガタマムシ

1 ♀, 徳之島三京林道, 13. v. 1973, 杉野広一採集。従来の産地は四国南部、九州佐多岬、屋久島、奄美大島で、徳之島からの採集記録は無かった。

5. *Agrilus okinawensis* Miwa, 1933 オキナワナガタマムシ (写真右)

6 頭, 波照間島富嘉, 11. vi. 1973, 柏井伸夫採集。従来の産地は沖縄本島、石垣島、西表島。加害植物の報告はないが、石垣島ではクロヨナより多数採集されている。

6. *Agrilus hornianus shibatai* Y. KUROSAWA, 1964 ホルンナガタマムシ

1 ♀, 沖縄本島与那覇岳, 3. vi. 1974, 入江平吉採集。

現在まで沖縄からの採集記録を欠いていた。

7. *Agrilus carinhumeralis* Y. KUROSAWA, 1964 カタスジナガタマムシ

1 ♀, 沖縄本島与那覇岳, 24. vi. 1974, 清野隆採集。

名の通り翅鞘の肩部から中頃まで明瞭な肩隆線を持つ。従来奄美大島以外からの記録を欠いていた。

8. *Mastogenius unsuspectus* Y. KUROSAWA, 1972

1 ♀, 沖縄本島名護城, 19. v. 1973, 柏井伸夫採集。

本種は体長3mmほどの微少なタマムシで、屋久島から採集された1 ♀に基づき1972年黒沢博士によって記載された後、他地域からの採集記録は全くない。なお本属が含まれる *Mastogenius* 属は屋久島から発見されるまでは北米からのみ知られていた属であって、遠隔の屋久島から採集された事は分布上大変興味深い。今回沖縄本島から採集されたが、同島は長い間アメリカの支配下にあった為、物資の輸送その他何らかの形で人為的に搬入された同属の別種の可能性も考えられたので、同博士のご好意により本種の模式標本と親しく比較検討した結果、同一種である事が判明した。(横浜市磯子区)

○チャイロコガネ属 2種の分布

チャイロコガネ類は、分類の難しい種類が多く、また発生期間も比較的短いために我国における食葉性コガネムシの中では、分布等の記録に乏しいグループの1つである。筆者は、現在手許にある本属に属するコガネムシのうち、分布記録の乏しい2種について報告する。

1. *Sericania ohirai* オオヒラチャイロコガネ

1960年沢田玄正博士により、愛知学芸大学の大平仁夫博士が愛知県本宮山において採集された標本に基づいて記載された種である。現在までのところ、原記載に使用された3頭の標本以外、本種の採集記録はないが、筆者は、下記の標本を検査することができた。

1♂：長野県戸台，2. vii. 1971，早川広文採集。

現在、東京農業大学昆虫学研究室に保管されている本種の type と比較検討した結果、外部形態や雄交尾器などの差異はほとんど見られなかった。

2. *Sericania marginata* フチグロチャイロコガネ

1973年野村鎮氏によって、長野県アズマ山を模式産地として記載された。現在までのところ holotype および栃木県日光で採集された1♂ (paratype) の他には記録がなく、雌は未だ知られていなかったが、筆者は、下記の標本を検査したので記録しておく。

7♂♂，3♀♀，山梨県御坂山地，8. vi. 1974，窪木幹夫採集；1♂，山梨県増富鉱泉，22. v. 1971，筆者採集。

本種は、近縁の *Sericania fuscolineata fulgida* (NIJIMA et KINOSHITA) に酷似しているために、両者が混同して取り扱われていることが考えられる。この小文を書くに当たり、貴重な標本をご恵与下さった、早川広文、窪木幹夫両氏に心よりお礼申し上げます。(東京都練馬区、小林裕和)

○ウミホソチビゴミムシの新産地

ウミホソチビゴミムシ *Perileptus morimotoi* S. UENO は、高知県仁淀川河口を原産地として記載された種で、同属のほかの種より小型で、色が黒く、眼が小さいので、識別するのはやさしい。本種は、その和名の示すとおり比較的大きな河川の河口部にのみ生息している。したがってその分布も、原産地以外、大分、徳島、三重の各県が知られているにすぎない。筆者は、三重県尾鷲付近の海岸線を調査した際に本種を採集することができたので報告する。

1♂，3♀♀，4. vi. 1975，三重県北牟婁郡相賀。

その後5月に和歌山県御坊市付近を調査したが本種を発見できなかった。

なお、この種に類縁のきわめて近いアサヒナホソチビゴミムシ *P. asahinai* S. UENO が琉球列島の西表島などから知られ、やはり河口の潮間帯に生息している。

末筆ながらご教示下さった上野俊一博士に厚くお礼を申し上げます。(東京都港区、森田誠司)

○対馬のハネカクシ追加 (ハネカクシ分布資料 3)

先に筆者は対馬から採集されたハネカクシ類13種を報告したが(本誌，21/22号)，その後須賀邦耀氏より下記の1種を恵与されたので追加記録しておく。

Algon grandicollis SHARP ムネビロハネカクシ

2頭，佐須奈，27. iv. 1968，須賀邦耀採集。

なお、前報で同島産ハネカクシ類に関する記録を紹介したが、それらから1972年の木下信一氏の記録が脱落していたので付け加えておく。即ち、同氏は自身の採集品に基づき、白岳および目保呂のそれぞれの地域から *Megalospidia japonica* NAKANE メダカオオキバハネカクシを記録している(四国昆虫学会々報，11(3): 98)。従ってこれで対馬からは20種のハネカクシが記録されたことになる。

(東京農大、渡辺泰明)

○台湾新記録のクワガタムシ

本誌14号(1971年11月)で、私は台湾未記録のクワガタムシ2種を記録し、台湾のクワガタムシは44種にもなると記しておいた。しかし、この数も早くも改めなければならなくなった。従来1種と考えられていた、ホソアカクワガタ *Cyclommatus scutellaris* MÖLLENKAMP が実は2種を含んでいたことがはっきりしたからである。

いわゆるホソアカクワガタに2種あるのではないかと云われだしたのは古く、戦時中の1940年頃からで、雌に黒条のあるものとないつたものがあることに抱ったものである。しかし、戦後はそのことも立消になってしまい、台湾の *Cyclommatus* は1種だけと考えられてしまった。ところが、北部に全く異なる別種トサカホソアカクワガタ *C. mniszechi* THOMSON が産することが確認されたのに続いて、ホソアカクワガタにもやはり2種あることがはっきりした。

その1種は、体や翅鞘に細かい点刻を密布し、光沢が弱い。従来のホソアカクワガタ *C. multidentatus scutellaris* MÖLLENKAMP で主として中南部の山地に分布するが、他の1種は点刻がほとんどなく、光沢の強い、ツヤホソアカクワガタ *C. albersi asahinai* Y. KUROSAWA で、主として中北部の山地に産する。翅鞘に黒条のある雌は後者の雌であった。種 *C. multidentatus* WESTWOOD, 1848 は北インドから記載された種であるが、M. de LISLE 氏によれば、中国から記載された *C. elsae* KRIESCHE, 1920 も同種内の変化にすぎないという。一方、種 *C. albersi* KRAATZ, 1894 もアッサムから記載された種類で、ビルマにも産し、別亜種が雲南からインドシナ半島全域に分布し、さらにマレー半島の山地にも別亜種がいる。ホソアカクワガタは従来台湾特産種とされて来たが、上記の通り、特産種ではない。詳細は、国立科学博物館研究報告17巻2号(1974年6月)所載の私の記載をご覧願いたい。

(国立科学博物館、黒沢良彦)

日本産 *Pidonia* 属の覚え書 (7)
 島々谷の *Pidonia* 属の記録・その2
 窪木幹夫

南北2000kmにおよぶ日本列島には、世界的にみても最も多数の *Pidonia* が分布している。これらには、春にカエデ類の花に集まるものから、夏にシシウドやショウマ類の花に集まるものまで、また分布も表日本型、裏日本型、そして低山性のもの、高山性のものなどがあり、日本列島の複雑な環境に分化適応し、各地で異なった *Pidonia* 相を呈している。これらの *Pidonia* 相を単に種類組成の比較にとどまらず、各種個体数の相対優占度、季節消長等を生態的に捕え、各地域の *Pidonia* の群集構造を比較し、それぞれの地域の特色を捕えることは重要である。一般に群集はいかなる時間空間においても相対的に少数個体の種類と相対的に多数個体の種類との両者から成り立っている。たとえば、本覚書(4)(本誌 Nos.23/24)で報告した島々谷(1973年7月30日~8月1日)の15種において、*P. insuturata*, *P. maculithorax*, *P. debilis*, *P. testacea*, *P. grallatrix* の5種の個体数が全体の84%を占め生態的優占種となっており、残り10種の個体数は全体のわずか16%にすぎない。今回はこの様な各種個体数の相対優占度の季節的な変化を調査したものである。調査コースは前回と同様に南谷の二俣(889m)と徳本峠(2135m)の間で行なったが各種 *Pidonia* はシモツケ、シシウド、ショウマ類の花上から採集された。前回その花上から、*Pidonia* が採集されたノリウツギはまだ蕾であった。

調査年月日：1974年7月22日~23日。

調査コース：前回と同じ。

なお、調査は筆者自身によるものである。また、*P. maculithorax* と *P. debilis* の2種は分散の調査に使用し、マーキングを行ない野外に放したため標本は残っていないので、マーキングをした個体数を記録した。

1. *P. puziloi* (SOLSKY) フタオビノミハナカミキリ, 8♂♂, 4♀♀(1100~1550m)。

2. *P. testacea* (MATSUSHITA) ニセフタオビノミハナカミキリ, 17♂♂, 12♀♀(1400~2135m)。

前回の調査では *testacea* と *puziloi* のおのおのの垂直分布は標高1400mを境に上下に完全に分離していたが、今回の調査では1400~1550m付近で両種のオーバーラップが確認された。特に1420m付近では、両種が同一のシシウドの花上にみられた。おのおの個体数の相対優占度が示すように、*puziloi* は春から初夏に出現し7月下旬にはその個体数は急激に減少し、垂直分布も狭くなり、わずかに1300~1400m付近にみられるようになる。一方 *testacea* は7月から出現し個体数を増し8月上旬には生態的優占種の一つになっている。

3. *p. semiobscura* (PIC) ホソガタヒメハナカミキリ, 128♂♂, 26♀♀(1100~2100m)。

4. *P. matsushitai* OHBAYASHI ヘリモンヒメハナカミキリ, 51♂♂, 17♀♀(1250~2135m)。

5. *P. ohbayashii* (MATSUSHITA) オオバヤシヒメハナカミキリ, 128♂♂, 28♀♀(1100~2135m)。

6. *P. signifera* (BATES) ナガバヒメハナカミキリ, 7♂♂, 1♀♀(1050~1400m)。

7. *P. mutata* (BATES) ヒメハナカミキリ, 8♂♂, 6♀♀(1400~2135m)。

8. *P. sp.*, 13♂♂, 11♀♀(1280~2135m)。

9. *P. maculithorax* PIC カクムネヒメハナカミキリ, 341♂♂, 133♀♀(1100~2135m)。

10. *P. discoidalis* PIC キベリクロヒメハナカミキリ, 11♂♂, 3♀♀(950~1850m)。

前報では、本種を *P. muneaka tamanukii* HAYASHI として報告したが、末端節腹板や median lobe の形態を調べた結果、本種と同定したので、前報(本誌 Nos.23/24)を上記のように訂正する。

11. *P. grallatrix* (BATES) オオヒメハナカミキリ, 58♂♂, 29♀♀(1100~2135m)。

12. *P. insuturata* (PIC) ヨコモヒメハナカミキリ, 241♂♂, 147♀♀(950~2135m)。

13. *P. masakii* (TAMANUKI) ムネアコヨコモヒメハナカミキリ, 101♂♂, 49♀♀(950~2135m)。

14. *P. simillima* OHBAYASHI et HAYASHI ニセヨコモヒメハナカミキリ, 7♂♂, 3♀♀(950~1500m)。

15. *P. oyamae* (OYAMA) オヤマヒメハナカミキリ, 49♂♂, 17♀♀(1100~2135m)。

16. *P. debilis* (KRAATZ) チャイロヒメハナカミキリ, 151♂♂, 114♀♀(950~2135m)。

以上のように今回の調査では、16種(総個体数1919頭, ♂69%, ♀31%)の *Pidonia* が採集された。*P. maculithorax*, *P. insuturata*, *P. debilis*, *P. ohbayashii*, *P. semiobscura*, *P. masakii* の6種が全体の83%を占め生態的優占種となっており、残りの10種は全体のわずか17%にすぎない。二回の調査を比較して、*P. maculithorax*, *P. insuturata*, *P. debilis* は順位がやや変るものの最優占種であった。*P. ohbayashii*, *P. semiobscura*, *P. masakii* は今回の方が優占度が高く8月に入ると個体数は減少している。今回新たに採集された *P. simillima*, *P. signifera* は共に垂直分布が広葉樹林帯に一致しており、初夏に出現する *Pidonia* で7月末には姿を消してしまう。*P. discoidalis* にも同様な傾向がみられた。垂直分布からみれば、比較的早く出現する *P. puziloi*, *P. semiobscura*, *P. ohbayashii*, *P. discoidalis*, *P. masakii* は8月になると個体数の減少と共に垂直分布も狭くなる傾向がみられた。

以上の結果から、*P. simillima*, *P. signifera* は初夏性の *Pidonia* であり、*P. testacea*, *P. matsushitai*, *P. mutata*, *P. sp.*, *P. maculithorax*, *P. grallatrix*, *P. signata*, *P. insuturata*, *P. oyamae*, *P. debilis* は夏期性の *Pidonia* で、*P. puziloi*, *P. semiobscura*, *P. ohbayashii*, *P. discoidalis*, *P. masakii* は、それらの中間に位置している。

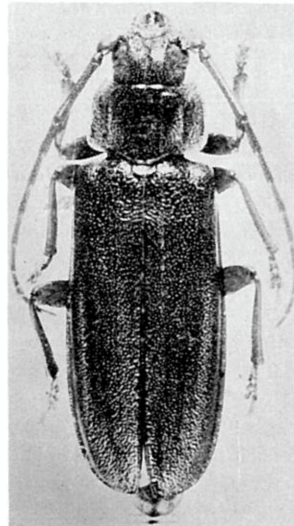
(東京農大)

○伊豆御蔵島産の興味あるカミキリ2種

1. *Euryoda unicolor* HAYASHI, 1965 コゲチャヒラタカミキリ 1♀, 御蔵島, 5. viii. 1973 中村俊彦採集。(写真左)

2. *Pseudiphra apicale* (SCHWARZER), 1925 ツマグロアメイロカミキリ 1♀, 御蔵島川田, 6. viii. 1973. 中村俊彦採集。(写真右)

1は屋久島, 対馬, 四国, 奄美大島に産する種で, イスノキの樹皮下より得られることが多いが, 筆者はシイの立枯れより夜間に採集した。また, 同時に数頭のベーツヒラタカミキリも得られた。本個体は屋久島や四国の個体に比し, 翅鞘の点刻はやや癒合する傾向があり, 光沢が強い様に思われるが, 既知の分布域より遠く隔った伊豆七島に産するのは, 最近, 近縁と思われる *Euryoda boninensis* HAYASHI et KUSAMA, 1973が小笠原島より記載されたとは云え, 非常に興味がある。



2は本来, 台湾, 紅頭嶼, ルソン, ミンダナオに分布域を持つ種で, 従来分布北限は沖縄本島与那。沖縄では数例の記録があると聞く。紅頭嶼, 八重山諸島は黒潮の影響をうけ, 気候的に類似性があり, しばしばフィリピン諸島からの生物伝播の経路となっていると云われるが, 伊豆七島は, 琉球とは遠く隔っており, 同一に論じることが出来ないと思われる。

本個体は形態的に沖縄, 台湾のものと殆んど差はないようで, 翅端角は黒色, 上翅基部角, 頭部, 前胸背は明るい橙色に体前部と後部がはっきり色分けされて居り, 同一の種と思われる。

(東京都板橋区, 中村俊彦)

○チュウジョウアオゴミムシの習性

1975年6月23日の夕刻, 屋久島宮之浦より宮之浦川沿いに約2km上った所で, 溪流沿いの斜面に生えているアオモジの地上約5mの幹に止っている甲虫を捕えてみたら, チュウジョウアオゴミムシ *Chlaenius chuji* JEDLIČKA の♂であった。本種は稀であるが, 叩き網で採れると聞いている。あるいは, 木や草に登るのが本種の一般的な習性かも知れない。なお, 当時は小雨で湿度は高かったが, 気温はさして高くはなかった。(国立科学博物館, 黒沢良彦)

訂正

27/28号で紹介した Dr. VILLIERS のハナカミキリの属検索の中で, 次の個所の訂正が同じ雑誌の31(2): p. 71に出ているのでお知らせする。

Tribe Rhagiini の10. の項にある“後附節第3節”は上下とも“後附節第1節”の誤である。
(国立科学博物館, 中根猛彦)

○対馬のホソツヤヒゲナガゴバネカミキリ

長崎県対馬におけるホソツヤヒゲナガゴバネカミキリ *Molorchus nitidus* OBIKA の正式な記録はないようなので, ここに書きとどめておきたい。

1♂2♀♀, 対馬上県郡佐須奈, 21. v. 1975, 西山保典採集。

上記の標本を原産地新潟県糸魚川市葛葉峠産のものと比較してみたが, 1♂の触角がいくぶん短いほかは特に差らしい差は見つからなかった。

なお, 対馬から従来ウスグロヒゲナガゴバネカミキリ *M. fuscipennis* HAYASHI として記録されていたもののいくつかは, 本種 *nitidus* のことではなかったかと思われる。

上記標本はコゴメウツギと類推されるものの花上より得られ, 同時にコジマヒゲナガゴバネカミキリ 1♀も採集されている。これら標本を恵与下さった西山保典氏に感謝申し上げます。

(横浜市金沢区, 高桑正敏)

○シリグロオオキノコムシの分布

シリグロオオキノコムシ *Dactylotritoma atricapilla* LEWIS の既知産地は基産地の奈良と肥後と奥村 尚氏による大菩薩峠の記録(インセクトマガジン55号)だけで, その後の新しい産地の記録を私は知らない。そこで, まことに古い話で恐縮であるが, 山形県で本種を採集した時のことを記し, 本種が東北地方にも産することを記録しておく。

10頭, 山形県米沢市白布高湯温泉, 1940年7月中旬, 黒沢良彦採集。

山形県吾妻山中腹の白布高湯温泉の裏の荒地に転っていた, コメツガと思われる古い倒木の洞内に生じたヒラタケに似た有柄の軟茸に集っていたものである。古い記録であるので, 詳しい日付を思い出せないのが残念である。標本は当時オオキノコムシ科の研究で有名な故荒木東次氏に全部提供してしまい, 一頭も残っていない。当時, 氏は本種を所有されておらず, 大変喜ばれたのを思い出す。この標本は, 1942年に氏が台湾から *D. formosana* と中国から *D. chinensis* の2新種を記載された時の比較標本となったものであるが(台湾博物学会会報32巻228. 229号), 残念ながら氏の蒐集品は全部戦災で焼失して残っていない。従って, これらの標本も全部同時に失われたわけであるが, その後, 中部地方以北の地域で本種の採集例を聞かないので, 敢て記録することにした。(国立科学博物館, 黒沢良彦)

○糖蜜トラップで採集されたハネカクシ類

オサムシ採集用に使用される糖蜜トラップには、地上性の種々のハネカクシ類が誘引されることは、既に経験的に知られており、柴田泰利氏も *Tympanophorus hayashidai* を新種として記載した際に、本種の1♀が *Ocyptus scutiger* SHARP, *Anisolinus picticornis* SHARP 及び *Tachinus japonicus* SHARP 3種と共にこの様なトラップから採集されたことを記述している(1975, 昆虫, 43(1): 20~28)。筆者は昨年富士山麓の地上性甲虫類調査のために設置されたこの様なトラップから数種類のハネカクシ類を、石川良輔博士の御厚意で採集することができたので記録しておきたい。設置場所は表富士4合目(高鉢)および富士吉田市に近い「諏訪の森」と呼ばれている地域の2ヶ所である。

○表富士4合目(高鉢)

1. *Megalopaederus lewisi* CAMERON

3♂♂, 8♀♀, 16~23. v. 1974; 48♂♂, 29♀♀, 23. v. ~4. vi. 1974.

本種は成虫越冬と考えられるが、出現初期には♂個体が圧倒的に多く、出現時期の経過とともに漸次♀個体が増加してゆく様に思われるのは興味深い。

2. *Anisolinus picticornis* SHARP カタモンブチヒゲハネカクシ

3♂♂, 6♀♀, 23. v. ~4. vi. 1974.

3. *Amichrotus apicipennis* SHARP ズマルハネカクシ

1♀, 23. v. 4. vi. 1974.

4. *Quedius (Microsaurus) adustus* SHARP

チャイロツヤムネハネカクシ

1♀, 23. v. ~4. vi. 1974.

5. *Bolitobius prolongatus* SHARP アカチャキノコハネカクシ

1♂, 1♀, 16~23. v. 1974.

6. *Tachinus trifidus* SHARP

2♀♀, 16~23. v. 1974.

○富士吉田市(諏訪の森)

1. *Agelosus carinatus* SHARP オオアカバハネカクシ

1♀, 23. v. ~4. vi. 1974.

2. *Quedius (Microsaurus) adustus* SHARP

チャイロツヤムネハネカクシ

3♂♂, 23. v. ~4. vi. 1974.

(東京農大, 渡辺泰明)

○ハナノミ2種の記録

古い採集例で、今まで気付かずに過ごしてきたが、高桑正敏氏の勧めもあるので発表しておきたい。

1. *Glipa pici* ERMISCH タイワンオビハナノミ1頭, 三重県一志郡美杉村, 三重大学農学部付属平倉演習林, 17. viii. 1958, 穂積俊文採集所有。

本種の本州からの記録は“むし”25巻5号(1953), pp. 17~24の論文で、中根猛彦博士が大竹氏のコレクションの中に和歌山県高野山産の標本を発見され、本州最初の記録として発表されたのが最初である。この記録は、新昆虫10巻1号(1957)の中根博士の日本の甲虫(33)にも引用されたが、この発表以後は本州からは全く記録がない。

2. *Hoshihananomia auromaculata nipponica* NOMURA オオキボシハナノミ

1頭, 三重県一志郡美杉村, 三重大学農学部付属平倉演習林, 17. viii. 1958, 穂積俊文採集所有。

本種も本州での記録は奈良の他数例にすぎないと思われる。(愛知県小牧市, 穂積俊文)

○日本新記録のアカハネムシ

手許のアカハネムシ類標本を整理していたところ、日本から未記録であった *Pseudopyrochroa lateralis* (MOTSCHULSKY, 1860) アカアシアカハネムシが見出されたので報告する。標本は対馬有明山産(2♂♂, 12. vii. 1960, 筆者採集・保存)である。この種は今までシベリア, 朝鮮, 済州島に分布することが知られており、これで対馬と朝鮮半島との関連を示す虫がまた一つふえたことになる。大きさ、強く三角に拡がる♂第2触角節、頭部の深い横溝などの点で *P. peculiaris* (LEWIS) ウスイロアカハネムシに似ているが、上翅地色が、朱色で、朱金色の被毛がある点、前背板の凹凸が弱い点、第8触角節が第2節よりはるかに長い点などで明瞭に区別される。(福井大学, 佐々治寛之)

甲虫談話会

会費(1カ年)1000円, 次号は12月中旬発行予定, 投稿〆切は10月31日。

発行人 黒沢良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園
国立科学博物館動物研究部内
電話(364)2311, 振替東京60664

昆虫の器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめてできた有頭昆虫針!!

1, 2, 3, 4, 5号(各号100本160円)

なお、無頭針00号もできました。その他、採集・標本整理用各種器具も取揃えてあります。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

電話(03)409-6401(ムシは一ばん)

振替東京21129

志賀昆虫普及社

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥4,500, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥1,400, 送料一箱につき都内及び第一地帯: 3箇以下 ¥750, 4個以上 ¥650(以下同様), 第2地帯 ¥850, ¥650, 第3地帯 ¥950, ¥750. 其他, 各種器具, 針などを製作販売してあります。カタログを御請求下さい。

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島2-21-25
電話(03)811-4547